釧路市立北中学校「学校だより」

北　魂

令和５年（2023年）９月11日発行　VOL 24

「横並び文化」のよさと弊害

釧路市立北中学校長　冨　田　直　樹

今から３年前の３月、新型コロナウイルス感染症が猛威を振るい始め、日本中が大混乱に陥りました。国は学校における集団感染を防ぐために、全国の学校に当面の間、休業するように要請しました。そして、約３ヶ月にわたって前代未聞の学校休業、６月から学校再開になりました。しかし、完全再開ではなく、分散登校という、学校にとっては初めての教育活動を行うことになりました。

ある中学校では、長期にわたった休業の後、どのような形の分散登校が望ましいのかを全教職員で話し合いました。休業中は、生徒同士、教職員と生徒、教職員と保護者のつながりが十分ではなくて、学校再開への不安が感じられました。授業の遅れを取り戻すことを優先するのではなく、生徒同士、生徒と教職員とのつながりを築き、生徒が安心して学校生活を送れるような方法を考えました。

しかし、このような学校は、ほんの一部だったようです。多くの学校は、十分に児童生徒や学校の状況等を踏まえず、教育委員会の例示に従って、同じような形で分散登校を行いました。その結果、教職員は疲れ果て、ゆとりがなくなって疲弊していきました。児童生徒も、落ち着かず、疲れて荒れた学校も多くありました。十分に考えることもなく指示されたとおりに、そして他校と横並びで同じようにやってしまったため、自分の学校や児童生徒の実態に合わない取組になってしまったことが要因と考えられます。

学校には「横並び文化」が根付いていると感じることがあります。「横並び文化」は、多くの場面で便利ですし、安心です。何年も続いていることや共通理解のあることは、全員で揃えた方が確実に成果が出ることも多いと思います。

しかし、いつでも「横並び文化」が通用するわけではありません。「横並び文化」は、周りに合わせようとするので、自分で考えなくなってしまいます。思考が停止すると、学校全体が停滞してしまう可能性もあります。

何でも鵜呑みにして素直に従うことは危険を伴うことになります。「本当にそれでよいのか、もっと他によい方法はないのか」と考えてみる習慣を付けることは、どんどん新しい考え方や、やり方を生み出し、学校が主体的になり活性化することにもつながると思います。結果的に、そのような学校は強い組織となり、平時、非常時の関係なく、安定した学校運営ができるようになると思います。

２学期が始まった当初、これまでに経験したことのない残暑に襲われました。釧路地区には、初めて「熱中症警戒アラート」が発令されました。生徒の健康、命を守るために、教育委員会や校長会から多くのアドバイスをいただきました。自校の状況、生徒の実態等を十分に考えて判断できていたか、「横並び文化」に頼ろうとしていなかったか、考えさせられました。校長としての覚悟と自覚、そして責任の重大さを実感したところでした。